

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

## 主論文の要旨

論文題目 カテゴリー帰属を表す日本語ヘッジ表現の研究

氏名 梶原彩子

## 論文内容の要旨

本論文は、認知言語学の意味観に基づき、日本語のカテゴリー帰属を表すヘッジ表現について、その機能について、分析を行った研究である。

ヘッジ表現には、命題内容の曖昧さに関わる「カテゴリー帰属を表すヘッジ表現」と、発話行為の曖昧さに関わる「対人関係の調整を表すヘッジ表現」がある。本研究は、Lakoff (1972) 等を踏まえ、ヘッジ表現を「命題内容や発話行為をより曖昧にする、もしくは、より曖昧でなくする機能を有する語」と定義し、これまで注目されることの少なかった「カテゴリー帰属を表すヘッジ表現」の下位機能に注目した研究である。その中でも先行研究の少ない、拡張義が「カテゴリー帰属を表すヘッジ表現」としての機能を持つ「立派な」「えらい」「相当な」「程度副詞の名詞修飾」「英語由来の『ザ』」という語について、これらの下位機能を記述した。その上で、これらの語においても、先行研究で指摘されている通り、カテゴリー帰属を表すヘッジ表現と対人関係の調整を表すヘッジ表現としての機能が連続的であることを提示した。本研究の考察からは、「えらい」のタイプ②、「相当な」のタイプ③、「程度副詞の名詞修飾」「ザ」のタイプ②という下位機能が、カテゴリー帰属を表すヘッジ表現から、断定を避け、責任の所在を曖昧にする対人配慮を表すヘッジ表現へと機能を拡張させているだけでなく、両者の機能を併せ持つことを明らかにした。非ヘッジ表現とヘッジ表現の拡張経路については、非ヘッジ表現からカテゴリー帰属を表すヘッジ表現、そこから対人関係の調整を表すヘッジ表現のような経路を描くことを示した。その2つを結ぶ要素としては、程度性を帯びた表現の意味拡張への影響が示唆される。

第1章では、序論として、日本語の曖昧性とヘッジ表現の関わりについて述べた。

第2章では、本研究の考察対象であるヘッジ表現は、概念化者の存在を認める認知言語学の意味観に基づかなければ解釈が難しいことを示し、本研究の理論的背景となる認知言語学の意味観を概観した。そして、援用する主要な概念から、カテゴリー化と百科事典的知識を確認した。また、ヘッジ表現の定義と研究を概観し、ヘッジ表現の体系化を試みた Prince et al. (1982) では意味拡張という重要な視点が考慮されていないことを指摘した。先行研究とその問題点を踏まえ、本研究の目

的は、日本語ヘッジ表現を意味拡張の観点から捉え直すことであり、意味拡張を基盤とした日本語ヘッジ表現の機能の解明（研究課題 1）、日本語ヘッジ表現における Prince et al. (1982) の体系の適用可能性の確認（研究課題 2）、ヘッジ表現の拡張経路の検証（研究課題 3）という本研究の研究課題 3 点を述べた。

第 3 章では、本研究の考察対象表現の先行研究における記述を検討した。今井（2008）の言語テストを用いて意味拡張に伴う用法上の制約を確認し、カテゴリー帰属を表すヘッジ表現としての機能を持つ語義を示した。そして、「立派な」は、命題内容をより曖昧にする働きを持ち、「えらい」「相当な」「程度副詞の修飾用法」「ザ」は、命題内容をより曖昧でなくする（明確化する）働きがあることを述べた。

第 4～7 章では、各表現のカテゴリー帰属を表すヘッジ表現としての機能を持つ語義について考察し、下位項目の機能から、カテゴリー帰属を表すヘッジ表現としての各表現の機能を大きく次のように結論づけた。

「立派」：話者の対象に対するカテゴリー化に注釈を加える働き

- ・対象 X のカテゴリーへの帰属度を高める表現
- ・「X は Y である」という命題内容をより曖昧でなくする（明確化する）表現

「えらい」：話者自身の対象に対するカテゴリー化の程度を高める働き

- ・対象 X のカテゴリーへの帰属度を高める表現
- ・「X は Y である」という命題内容をより曖昧でなくする（明確化する）表現
- ※タイプ①は属性を明言せず、タイプ③は概括量を表すという点で、命題内容をより曖昧にする

「相当な」：話者自身の対象に対するカテゴリー化の程度を高める働き

- ・対象 X のカテゴリーへの帰属度を高める表現
- ・「X は Y である」という命題内容をより曖昧でなくする（明確化する）表現
- ・タイプ③発話者の命題内容に対する確信度を強める働き
- ※タイプ①③は程度がどの程度高いのかを明言しないという点で、命題内容をより曖昧にする

「程度副詞の名詞修飾」：話者自身の対象に対するカテゴリー化の程度を高める働き

- ・対象 X のカテゴリーへの帰属度を高める表現
- ・「X は Y である」という命題内容をより曖昧でなくする（明確化する）表現
- ・タイプ②話者自身の責任を弱める働き
- ※タイプ②は属性 Z を明言しないという点で、責任の所在をより曖昧にする

「英語由来の『ザ』」：話者自身の対象に対するカテゴリー化の程度を高める働き

- ・対象 X のカテゴリーへの帰属度を高める表現
- ・「X は Y である」という命題内容をより曖昧でなくする（明確化する）表現
- ・タイプ②話者自身の責任を弱める働き
- ※タイプ②は属性 Z を明言しないという点で、責任の所在をより曖昧にする

「立派な」は、対象 X のカテゴリーへの帰属度を高める表現であり、「X は Y である」という命題内容をより曖昧でなくする（明確化する）表現である。「えらい」も、対象 X のカテゴリーへの

帰属度を高める表現であり、「XはYである」という命題内容をより曖昧でなくする（明確化する）表現である。但し、下位機能のタイプ①が属性を明言しないこと、タイプ③が概括量を表すという点で、命題内容をより曖昧する表現でもある。「相当な」は、新たなカテゴリーの属性Zについて述べることから、対象Xのカテゴリーへの帰属度を高める表現であり、「XはYである」という命題内容をより曖昧でなくする（明確化する）表現である。但し、下位機能のタイプ①③が概括量を表すという点で、命題内容をより曖昧にする表現でもある。「程度副詞の名詞修飾」と英語由来の「ザ」も、聞き手のカテゴリーに対する百科事典的知識を活性化させ、新たなカテゴリーの属性Zについて述べることから、対象Xのカテゴリーへの帰属度を高める表現であり、「XはYである」という命題内容をより曖昧でなくする（明確化する）表現である。但し、下位機能のタイプ②が属性Zの明言を回避するという点で、話者の責任の所在をより曖昧にする表現でもある。

第8章では、第4～7章の考察結果を踏まえ、Prince et al. (1982) の分類における位置づけを見た。下位機能である「えらい」のタイプ②、「相当な」のタイプ③、「程度副詞の名詞修飾」「ザ」のタイプ②の用法がカテゴリー帰属を表すヘッジ表現と対人配慮を表すヘッジ表現としての機能を併せ持ち、Prince et al. (1982) には位置づけられないことを述べた。そして、第2章で取り上げた先行研究での指摘の通り、カテゴリー帰属を表すヘッジ表現と対人関係の調整を表すヘッジ表現という2つのヘッジ表現は連続的であり、その2つを結ぶ要素としては、程度性の影響があることを述べた。ヘッジ表現内の機能、カテゴリー帰属を表すヘッジ表現と対人関係の調整を表すヘッジ表現、非ヘッジ表現とヘッジ表現の拡張経路についても、非ヘッジ表現からカテゴリー帰属を表すヘッジ表現、対人関係の調整を表すヘッジ表現のような経路を描くことを述べた。